「砧」を歩く

廣田　幸稔

能「砧」の舞台は福岡県遠賀郡芦屋、遠賀川の河口付近に広がる地域です。第四回廣田鑑賞会（２００５）同曲を舞わせて頂いて以来、遠賀川には二度目の来訪です。

ＪＲ九州鹿児島本線水巻駅で下車。駅前の田んぼ道はタクシー乗り場もあるロータリーに整備され、２０２０年３月にオープンしたばかりの「水巻天然温泉いちょうの湯」もあって、すっかり明るく近代的な駅前に変わりました。事前に調べた水巻町歴史資料館（遠賀郡水巻町）に行くため駅からタクシーに乗り、まずは立屋敷地区遠賀川流域の八剱神社（やつるぎじんじゃ）へ向かいます。

八剱神社の主祭神は日本武尊と砧姫命。由緒によると「第十二代景行天皇の御代、日本武尊は筑紫の熊襲征伐の途次、この地で砧姫を娶られた。尊が東国征伐の帰途、崩御されたのを聞き、尊の仮宮跡に社祠を築き、『御館大明神』として祭るを当神社の起源とする。後に『八剱大明神』と改称」とあります。境内には樹齢六百年を超える銀杏の大木があり、遠賀川土手には二本の夫婦銀杏も葉を茂らせています。運転手さん曰く、夫婦銀杏の方が、ぎんなんがよくなり、地域の

↑稲作文化発祥の地の碑

↑JR 九州水巻駅

←八剱神社本殿

婦人会で集めて収益は境内の収益にあてているとか。また、水巻町歴史資料館にあった『砧姫物語』の伝承によれば、砧姫は讒言により都から水巻の地に逃れてきたこと、尊は砧を打つ彼女の美しさに惹かれ砧姫と名乗らせたこと、二人の間に生まれた男児は砧王と名付けられたこと、日本武尊が東国征伐に向かう時に銀杏を植えたこととあります。同じく遠賀郡水巻町の長専寺には、砧姫の墓と伝えられる古墳より出土した鏡を、鏡観音として祭られているそうです。直接、能「砧」との関係はないですが、夫の帰りを待つ砧という名の女性がいたことが伝説として残っていました。

能「砧」の女の夫は「芦屋の何某」です。遠賀川河口には芦屋津の港があり、茶道で使われる芦屋釜の産地です。親切に対応してくださった水巻町歴史資料館学芸員の方に感謝しつつ、芦屋町歴史民俗資料館（遠賀郡芦屋町）に足を伸ばし、そこでタクシーを下車しました。

芦屋釜は十四世紀南北朝頃から製造が始まり、室町時代にかけて茶道の湯釜として盛んに用いられました。その後、茶の湯文化の担い手が公家・武家・寺社から、堺や京の町衆に移ることで、芦屋釜に代わり京三条釜座が台頭します。

資料館には縄文弥生時代の出土品から中世、近世の展示品が数多くあり、源平合戦町内史跡図や、伊万里焼を船に載せて全国を売り歩いた芦屋の旅行商人（たびゆきしょうにん）の旅程図、時宗念仏

鳥居左手は福岡県指定天然記念物八剱神社の大イチョウ→

踊りから始まったとされる福岡藩最大の芸能集団・芦屋役者の資料などを興味深く見て回りました。

中でも応安元年（1368）に創建された時宗の金台寺は、旧遠賀郡一帯を支配した山鹿城主麻生氏の菩提寺でもあり、中世には栄華を誇ったこと。また、時宗の寺は芸能者や商工を生業とする人々の拠点であり、時衆の中には世阿弥・観阿弥のような優れた芸能者もいたという説明に少し嬉しくなりました。

夫の帰りを待つ砧姫、芸能や職能に優れた時衆の人たち、その拠点となった時宗の寺。物語が残っていく要素を感じた旅でした。

令和五年文月吉日

↑芦屋町歴史民俗資料館

↑夫婦銀杏　遠賀河畔を走る県道73号直方水巻線の両側にたつ

←芦屋港